



TITLE:

天文隨想

AUTHOR(S):

竹内, 時男

CITATION:

竹内, 時男. 天文隨想. 天界 1939, 19(217): 204-206

ISSUE DATE:

1939-04-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/167810>

RIGHT:

天 文 隨 想

東京工業大學 理學博士 竹 内 時 男

廣く多數人の觀察や觀測を輯めることは、同代の學者は勿論後代の研究家に對して大きな參考になるものである。但しその記載は飽くまで科學的正確であるべく、美辭佳句を必要としない。寧ろその煩はしさの無い簡素な表現こそ、科學記事として價值があるのである。時日、天候、場所、現象觀測の計測的記載が是非要るのである。

中央氣象臺でもこの程觀測事項を蒐集する必要から、小冊子を出して居られるが、我が「天界」にも同様の趣旨が包藏されてゐることと思ふ。外國の雜誌例へば Nature には屢々球電やその他天界氣界の稀らしい現象に關する投稿がある。あれは非常に貴重な材料となるもので、編輯者はこれに對して少からぬ頁を割愛致して居る。

主幹山本一清博士は、素人網を全日本に編組し、否世界的にも擴大されんとしてゐる。多くの俗人の觀測は、一人の學者の觀測よりも勝るのが普通である。素人、素人と輕んずることは、相濟まぬ場合が多い、

私の許へも、時折素人からの便りが來、これに對する説明を求められるのである。難有受取つて返信してゐるが、中には誠に非科學的敘述であつて、どうにも困り果てるものもあるし、又中には大いに警戒して採擇せねばならぬやうな怪げなものもある。

私もどちらかといへば、天文學の方には素人に近いが、大學では、一年の時寺尾壽豪長の球面天文學を天文學科學生と一所に聽き、最後には私一人になったことを覚えてゐる。三年の時平山 信教授の天體物理學を聽いた。前者は極めて端麗な講義であり、後者は急歩で且暫所であつた點に於て、對照をなしてゐた。何れも天文學に對して自信を與へられるものであつた。東京帝大で開かれる日本數學物理學會の常會では、平山 信教授の位置決定用の簡單カメラが紹介されて、大變心嬉しく感じた。その時分は氣象學の講義といふのが無く、寺田寅彦助教授の地球物理學が僅かの時間があつた。けれども氣象學の演習が

あり、中央氣象臺の報告を土臺にして色々統計的な研究をやり、寺田博士が之を理論附けられてゐた、博士の親しみ深い實驗の指導などと共に、氣象學にも幾分の確信を持ち得るやうになつた。けれども統計のみに終始するのは何と無く物足らなく感じた。後にさういふ方面に入る機會が先輩から與へられたのであつたが、遂に専門に研究すること無きに到つた。これは今から考へると、惜しい氣もする。その時分京都天文學の一團が新城博士に率ゐられて、大舉日本數物物理學年會に發表し、來會者の讃嘆を蒐めたものである。その中に、山本博士が中堅として大いに光つてゐたのである。原子物理學を應用した宇宙論や太陽觀測設立の計劃など、大いに私の興味を喚んだものであつた。

一戸直藏博士が現代之科學を主宰して、新高山に大天文臺を建てると、血を吐きつゝ叫ばれた悲壯や、先輩などとの意見の衝突があつたことなどは、その情熱を高く買ひつゝも、尙一抹の暗さを感じた。現代之科學には私は相當期間執筆してゐ、神田茂學士が編輯顧問になられた時分からその廢刊の末期までも、科學時事を書いてゐたものである。

長岡博士が望遠鏡の廻折を論ぜられて *Journ. Astrophys.* に掲載されてゐた。それから、あの立派な紙質で表紙の曲雜な同誌が無障に好きになり、よく披見したものである。

外國留學中眞先に田中館博士の紹介狀を持つてボツダムのアイシュタイン塔を訪れ、臺長の邸で夫妻に招ばれたものである。あすこで研究もしたかつたのであるが、他に新興の波動力學があつて、シュレーディンガー教授に就いたものである。ドゥ・ジッター、エジントンその他の天文學者にも會見したが、これ等は歸朝後「アインシュタイン宇宙論の新發展」の學說起草する時に、大いに力になつた。

天文學と理論天文學とは密接の關係があり、常に物理學者に天文學の推移に注意せねばならなくなつた。實用的方面ではイオン層の研究があり、これは黃道光と關係がありさうである。これに關聯してその方の權威チアツプマンにも會つた事がある。又物質消滅や中性子星の事柄も、彼我互ひに協力せねばならぬ狀態にある。

しかし色々な天文學者の中でも山本一清博士程親切に、弱者の見方となつて

私共の天文學への憧憬を高め、その門に入り易く案内された人は外には見當らない。私は同博士の御陰で皆既日食のコロナの偏光寫眞を世界最初に立派に撮り、又陰影縞の觀測もそれから附隨の實驗をもなすことが出来た。黃道光への近づき易い案内者でもあられた。私はその賜物として數箇の論文が出来た。學徒として論文が出来ること程楽しみは無い。来るべき皆既日食には、旅費の都合さへ出きるなら、コロナの偏光活動寫眞を撮らうと期待致してゐる。

山本博士によつて、天文學は始めて帝王、王侯の學でなくなり、大衆の學とまで水準を下げられた。これは日本の文化的發展に於て非常な功蹟である。

膨脹宇宙論も近年一度迷路に入つたが、最近再び論議されるやうになり、マックヴィットやフリントなどにより宇宙曲率の正負や、アインシュタイン項などが又々問題になつて來た。大宇宙を理論に掛けることは實に偉大なことで、人智の窮極と申しても宜からう。これ等に就いては、次の機會に筆を執り度ひと思ふ。(バリ造幣局で買ったルヴェリエーのメダイオンを前にして)

故田中宗愛博士を憶ふ

理學博士田中宗愛先生は去る二月一日3時忽然として此世を去られた、誠に惜しい極みである。先生は明治24年生れで幼少の頃より自然科學に非常に興味を持たれ、鹿兒島の第7高等學校に在學中本會地方委員にして同校教授村上春太郎氏より個人的に天文學を教へられ、屢々村上氏宅の望遠鏡で深更迄2人で天體觀測せられた、其頃傍に居られたのが名古屋の金城女專教授村上忠敬氏の幼妾であつた。

大正6年東京帝大農科御卒業後日本染料會社に技師として就職、大正9年五月12日神戸出帆の三島丸にてヨロツパに向ひ、スイス・ドイツに於いて5年間有機・觸媒・酵素・染料化學を御專攻、此の間に日獨賠償委員として東奔西走せられ、ヨロツパ各地の天文臺・天文學者を歴訪され、フラマリオン氏を再三訪ねて行かれ、深く天文學をも究められた。大正14年九月御歸朝後滿鐵中央試驗所科長に就職せられて此間に理學博士號を授けられ、昭和9年神戸女學院専門部教授に招ぜられて教鞭を執られ、學内でも異色ある先生として亡くなられ